

# 『季刊三千里』の立場(1)

— 総連との決別 —

朴正義\*

(e-mail: kannan322@hotmail.com)

---

## 目次

---

- 1 はじめに
  - 2 『朝鮮新報』の批判に答える
  - 3 総連議長韓徳銖を批判する
  - 4 おわりに
- 
- 

## 1 はじめに

過去において日本で、組織の機関紙でなく、純粹に民間在日(在日韓国人・朝鮮人、以下在日とする)によって創刊された一般雑誌があった。それは、1975年2月創刊、13年間続き、1987年5月巻50号で終刊した『季刊三千里』<sup>1)</sup>である。編集委員の姜在彦、金達寿、金石範、李進熙、徐彩源、李哲氏、そして若き日の姜尚中氏など、当時の在日を代表する知識人を総動員する形で執筆が行われた。さらに、当時の日本の著名な知識人、司馬遼太郎、上田正昭、大江健三郎、旗田巍、飯沼二郎、門脇禎二、梶村秀樹、いいだ・もも、日高六郎氏などなど挙げれば限がないほど、多くの日本人に朝鮮を語らせている。

創刊の主旨は、李進熙氏が、

---

\* 圓光大學校 日本語教育學科 日本學 朴正義

1)1975年2月、三千里社(社主：徐彩源)を創設し、編集人：李進熙、発行人：李哲によって発刊された。

本誌が創刊されたのは1972年の七・四南北共同声明の後であったので、南北の分断を固定化する方向でなく、それを抑止する方向で雑誌を作りしようということで始めました。それから、日本と朝鮮の関係を、「日本帝国主義——」といったシビアな形でなく、淡々と話し合える関係につくっていくこと、この二つを柱にして編集してきました。2)

と語るように、その内容は統一問題という政治的な問題だけではなかった。朝日関係が17回、朝鮮近・現代史が15回、朝鮮文化が3回、古代朝日関係史が2回、在日朝鮮人問題が13回、と特集が組まれたように、日本人に朝鮮を理解させるのに多くの努力を費やしている。

飯沼二郎氏をして、

『季刊三千里』が積み上げた功績は三つあると思う。一つは南北に片寄らない自立の立場が貫かれたこと、これは大きいですよ。第二には日本人の目を複眼的にしてくれる努力。私は20年前に強制送還阻止運動に関わり、初めて在日朝鮮人の姿が少しずつ見えてきましたが、本誌は複眼の思想と言うか、日本人と朝鮮人の両方の目で見ようとする努力によって、日本人の目を開いた。それから第三には、在日の問題が単に彼らだけのものではなく、日本人自身の問題だということへの理解を助けた。在日朝鮮人の人権が守られていない限り日本の民主主義は本物でない。その点を気付かせてくれた。3)

と述べさせているように日本人に朝鮮を考えさせ、在日問題だけでなく韓半島統一をも自らの問題として捉えさせた功績は大である。そして、当時、『季刊三千里』は、日本の多くの大学において副教材としても採用された。

解放後も日本植民地支配の絆を引きずり、南北政府の狭間で自らの未来を主体的に切り開くことができなかつた在日が、この雑誌を契機として、それまでのタブーであった「日本に定住する」ことを念頭において、南北どちらにも片寄らない自主的な立場でもって主張するようになった。このような時、『季刊三千里』は、在日の将来への方向性を示したものであった。まさに在日一世の結論とも言え、終刊後20年以上たった今も、古典でなくその精神は息づいている。遅きに期した感はあるが、北は別として南において民主化がなされた現在(完成したと言っているのではない)、客観的にこの雑誌を再評価すべく、本研究を進めた次第である。

この『季刊三千里』を考えるうえで、一番最初に押さえて置かなければならないのが、『季刊三千里』の立場の確認である。過去において、この『季刊三千里』は「反韓親北雑誌」と規定されていた。

2)李進熙他2人「『季刊三千里』の十三年」(『季刊三千里』五十号 三千里社 1987年 5月 p.250

3)上掲書 p.259

この雑誌の創刊号の特集が「金芝河」である。この時期、大統領緊急措置第四号に基づき、軍法会議で金芝河氏に対して死刑が求刑された。これに対し、日本では和田春樹や大江健三郎などによって、「金芝河救命運動」が活発に繰り広げられた。まさに、在日としてこの「金芝河救命運動」に呼応する形で、創刊号の特集が組まれたといえる。その後も、第十号「韓国の民主化運動」、第二十二号「『四・一九』二十周年と韓国」と特集がくまれ、さらに、雑誌『世界』のKT生と同じくK・IIによる韓国通信、民主化関連記事を毎号のように載せるなど、一貫して南の反独裁民主化運動に連帯する姿勢を示した。朴独裁政権下において反政府＝反国家(韓国)＝親北という公式があった当時、民団(在日本大韓国居留民団)そして韓国政府にとって、『季刊三千里』は「反韓親北雑誌」以外のなにものでもなかったといえる。

さらに、『季刊三千里』の編集委員その殆んどが、朝連(在日本朝鮮人連盟)<sup>4)</sup>時代からの元総連(在日本朝鮮人総連合会)の活動家であったため、その編集委員また執筆者まで反韓・親北容共人士、「総連の別働隊」として規定された。

しかし、反政府＝反国家(韓国)＝親北という公式は、当時の独裁政権が反独裁民主化勢力を抑えるために作られた公式にしか過ぎず<sup>5)</sup>、在日において反韓親北であるかどうかを見定めるのは、親総連であるかどうかである。何故なら、この時総連は、全在日朝鮮人の代表としての性格を失い、北朝鮮の「海外公民団体」としての役割を果たしていたためである。当時、親総連はまさに親北(朝鮮)であった。

今回は、この総連に対する『季刊三千里』の立場を検討することによって、「反韓親北雑誌」であったのかを明らかにした。

## 2 『朝鮮新報』の批判に答える

総連の機関紙『朝鮮新報』における『季刊三千里』に関する最初の記事は、1975年2月15日付け「知らせること—総連とは関係のない日本語雑誌『季刊三千里』」という

4)1945年10月15日に、共産主義・民族主義・労働運動家など思想・信条を越え大同団結し組織された大衆組織であった。後、米占領軍によって強制解散され、1955年に在日本朝鮮人総連合会として再組織化される。(朴慶植「解放直後の在日朝鮮人運動」(『在日朝鮮人研究』創刊号 在日朝鮮人運動研究史 1977年12月 p.p.56～70)

5)「国家と国民の意思に叛くものを反国家行為という。反政府は反国家ではない。政府は常に国民は一つだと考え、国民のいうことを聞かなくても分かる全治全能だと主張する。政府のいうことが国民に受け入れられていない。そして国民を弾圧している。政府は決して全治全能でない。国民は真実を見ることも、聞くことも、話すことも出来ない。…国民は政府と他の指導者が一致して国家を動かしてほしいと願っている。この意思に叛くことこそ「反国家行為」である。(「民主救国宣言」事件の1976年12月18日の文益煥牧師の最終陳述。『季刊三千里』十号 三千里社 1977年 5月 p.93)

題目で、『季刊三千里』は総連とは何ら関係がない雑誌であることを簡単に告知したものであった。しかし、これは総連組織の者さらにその心棒者に対して『季刊三千里』を読むなど暗示するものでもあり、その中の「日本語雑誌」とは「民族虚無主義」を意味するものであった。

これに対し、編集委員の一人である李進熙氏は「本誌が創刊されたい、いわゆる韓国系のある筋から、『季刊三千里』は総連の別働隊だというデマがながされたのですが、総連からまったく関係ないと言われて、一面ほっとしたことを覚えていますよ(笑い)。我々としては、むしろ自由な立場で編集ができるのではないかという気がしました」<sup>6)</sup>と述べ、この時点では、無理して総連と消耗的な論争する必要性を『季刊三千里』は感じていなかった。

また、金時鐘氏の「猪飼野詩集」が一号から四号まで連載された。しかし、その後の掲載予定だった金日成から金正日への政権世襲を慨嘆する金時鐘氏の風刺詩「十三月がやってくる」が、朝鮮総連との関係が悪くなれば続刊が難しくなるとの編集部への危惧により掲載拒否された。これ以後、『季刊三千里』と金時鐘氏との関係は途絶えている。このように、『季刊三千里』は、総連との関係悪化を極力避けていた。

ただ、『季刊三千里』が「日本語雑誌」であることを「民族虚無主義」とする批判に対しては明確な反論を行っている。『朝鮮新報』「民族虚無主義の所産」という題目の記事において「解放後三分の一世紀が過ぎた今日まで、かつて日本帝国主義から“皇国”の“奴隷臣民”になれと強要された日本語と、それを通じて扶植された奴隷思想をいまだに捨てずに、……日本語の才能を競って見せている」(朴鐘相)<sup>7)</sup>と日本語で書くことに対する批判をしたが、これに答える形で李進熙氏は「われわれが今、日本語でものを書き、日本語で雑誌を出しているというのは、日本人に朝鮮の歴史なり現状なりを理解してもらい、かつ統一に向けていくらかでも力になろうということなんで、日本語で書くということ自体が問題でないはずですよ」<sup>8)</sup>と、日本語で書く意味を明確に示した。また、『季刊三千里』は、日本の地に宿った在日文学を紹介し、金達寿、金石範、高史明、李恢成氏などの著名な作家だけでなく、新たに多くの在日新人作家を発掘した。

総連の本格的な、『季刊三千里』批判が始まるのは、『朝鮮新報』の1976年11月9日付け「事態を歪曲したおろかな反共和国宣伝—『季刊三千里』掲載の正体不明の論文によせて」、1976年12月23日付け「在日朝鮮人問題についての誤った『世代論』—『季刊三千里』掲載の論文によせて—」からである。

『季刊三千里』は、これら一連の批判に対して、1977年8月発刊の10号に、座談会「『朝鮮新報』の批判に答える」を組んで自らの立場を明らかにした。本来『季刊三千

6) 「『朝鮮新報』の批判に答える」(『季刊三千里』 十号 1977年 5月 三千里社 p.125)

7) 『朝鮮新報』1979年8月10日付けの論評 朝鮮新報社

8) 『季刊三千里』 二十号 1979年 11月 三千里社 p.96

里』の座談会は、著名な日本人のなかに編集委員が加わり、日本人に朝鮮を語らせるのが慣例であった。しかし、この時の座談会は姜在彦、金達寿、金石範、李進熙、李哲氏と編集委員のみで構成され、『季刊三千里』として『朝鮮新報』の批判に答えた。

## 2-1 「事態を歪曲したおろかな反共和国宣伝」

まず、「事態を歪曲したおろかな反共和国宣伝」は、『季刊三千里』の第八号に載った韓国在住のK・Iからの寄稿文「戦争と平和一揺れるソウル」の中に書かれている「板門店ポプラ事件<sup>9)</sup>」に対する批判である。その批判内容は

『季刊三千里』八号に「K・I」という正体不明の者が書いた「戦争と平和一揺れるソウル」の一文を掲載して、またも時代遅れの反共和国宣伝をくりひろげている。筆者はこの論文のなかで、板門店事件が北の挑発によって発生したかのように描写している。……もの書きは客観的な報道に基づいて文章を書くのが常道だ。ところがこの筆者は、傀儡新聞と日本の御用新聞だけを引用し、それに基づいて北の『侵略性』を捏造している。……筆者はつぎに、フォード徒党の無謀な戦争準備を美化する一方で、アメリカ帝国主義侵略者が「抑止的姿勢を堅持したため不慮の軍事衝突は起こらずに収まった」といって世論を欺いている。……共和国北半分を悪辣に誹謗中傷しているこの論文は、言うまでもないことながら、傀儡中央情報部がつくりあげた謀略宣伝に全的にもとづいたものであって、これはすなわち、筆者が朴正熙徒党の立場を代弁していることをしめしている。……そしてわれわれは、『季刊三千里』の編集者達がどのような意図から自分の名前すら明すことができない、そういう臆病者のいいかげんな文章を載せたかについて、慎重な注意をはらわざるえないのである。<sup>10)</sup>

批判の主内容は、「韓国や日本の報道だけ引用し、北の『侵略性』を捏造している」である。しかし、K・Iは韓国にいる韓国人で、言論統制下の朴大統領時代では、一方的に報じられる情報—それは『朝鮮新報』がいう傀儡新聞と日本の御用新聞かもしれない—に従い事件の概要を書くしかない。その部分だけを読めば、『朝鮮新報』の記事が指摘するように北の「侵略性」を捏造しているとも読める。問題はそこからである。つまり、それらの記事からK・Iが事件に対してどのような判断をくだしたかである。K・Iは、

長い目で見るとどのようなプラス、マイナスになるか分からないが、この事件を一、二ヵ月の単位で見ると、韓国の得た収穫は大きかった。北朝鮮から国連軍司令部の解体をつ

9)1976年8月18日、板門店で発生した事件。韓国では8.18斧蛮行事件または斧蛮行事件とも呼ばれる。

10)『朝鮮新報』1976年11月9日付けの論評 朝鮮新報社

きつけられ、韓米安保条約に基づく駐韓米軍の存在すらカーター米民主党大統領候補の出現で段階的縮小あるいは撤退へと米国世論が動いている中で、今秋の国連総会では窮地に立つことは決定的となりつつあった。ところがポプラ事件で示された米国の「力の脅威」は金日成メッセージ』という異例の軟化を引き出した<sup>11)</sup>。

事実、米国はフォード大統領の直接命令で軍事行動を起こしたわけだが、これは昨年カンボジア沖で発生した米艦マヤゲス号だ捕とその奪回作戦以来、力による解決だった。あるいはケネディ時代のキューバ危機のさいの全米軍戦闘態勢命令と軌を一にする恫喝外交に他ならない。北朝鮮の応戦がなかったため、戦争につながらなかった—という見解も依然として残っている。武力の威圧を武器とする駐韓米軍はやはり火薬庫の一つと言えるのではないだろうか。<sup>12)</sup>

と語っている。これらの部分からは、北の「侵略性」は読み取れない。むしろ韓米に対して、批判的な判断を下しているといえる。

さらに、「ポプラ事件」はK・Iの寄稿文の一部でしかなく、そこにはそれ以外として、「民主救国宣言」を「政府転覆扇動事件」とし金大中前大統領候補ら18名が大統領緊急措置九号違反で起訴されたこと、また金芝河氏の死刑判決など、朴政権批判が綴られている。<sup>13)</sup>にもかかわらず、この寄稿文を北を批判するものとし、その中から北との対決姿勢を批判・民主化を求望を、『朝鮮新報』は読みとれずにいる。このような『朝鮮新報』の批判に対して、『季刊三千里』の座談会で金石範氏は、

彼ら(『朝鮮新報』)は、KCIAと同じ考えに通じるとか。悪辣な反共和国的宣伝とか。とにかく、いままで総連が常套的に使っているところの言葉を使って批判しているのですが、ソウルにいるK・I氏には、K・I氏の見解があるんですよ。論評の最後に編集委員を批判していますが、もちろん編集者がその立場で原稿を取捨選択すべき問題もあるけれども、この場合はそういう立場の原稿ではないんです。にもかかわらず、彼らはこういう原稿をありうることを前提としないで批判を加えているんですね。これでは論争にならないですよ。批判は批判としてわれわれは受け入れますが、この『朝鮮新報』の文章は論争のかたちになりませんよ。しかし、文章をみれば分かることだが、これは批判ではなしに、ののしりであって、何かいちゃもんをつけようとしているとしか思えません。<sup>14)</sup>

と、自らの見解と異なる場合、「悪辣な反共和国的宣伝」「KCIAと同じ考えに通じる」

11) K・I「戦争と平和一揺れるソウル」(『季刊 三千里』 三千里社 八号 1976年 11月 p.p.122~125)

12) 上掲書 p.124

13) 上掲書 p.p.125~129

14) 「『朝鮮新報』の批判に答える」(『季刊 三千里』 十号 1977年 5月 三千里社 p.128)

という言葉を使い、一方的に根拠を挙げず高圧的に相手を押さえ付けようとする姿勢では論争にならない、と指摘している。

また、K・Iと本名を名乗っていないため「正体不明」と批判されたことに対しては、姜在彦氏は、

少なくとも『季刊三千里』においては、自分の書いた文章に責任を持つという明確な立場を堅持しているということです。だから、原則としてペンネームは使わないことになっているんです。ただし、K・I氏の場合は彼のおかれている状況の問題がありますからね。また、論評のもう一つの批判部分である板門事件についての見解があるように、K・I氏の述べている見解が現実には韓国にあるということなんですね。<sup>15)</sup>

やはり『朝鮮新報』の批判が論争の対象にならないと述べている。

## 2-2 「在日朝鮮人問題についての誤った『世代論』」

次に、「在日朝鮮人問題についての誤った『世代論』 —『季刊三千里』掲載の論文によせて—<sup>16)</sup>は、姜在彦氏が『季刊三千里』の八号に寄稿した「在日朝鮮人の65年」<sup>17)</sup>という論文に対する批判である。

この論文を評して飯沼二郎氏が、

在日韓国人・朝鮮人の中で一世は二割りを切っている。だから、それ以外の人は、日本で生まれ育った人ですからね。で、おそらく統一ができたとしても、日本から帰る人よりも、日本にとどまる人の方が、むしろ多いんじゃないか。とすれば、日本にとどまることが、統一されるまでの腰掛けだという考え方はなおして、もっと日本に定着するように、そのためのいろいろな市民権というものを獲得していくことを積極的に考えるべきじゃないかというのが、姜在彦さんのあの論文の趣旨だったと思うんですね。<sup>18)</sup>

と述べるように、「在日朝鮮人の65年」は、世代が変わることによって風化していく民族意識をデーターを基に指摘し、それに対する「運動としての対策と方法」を示したものである。

これに対する『朝鮮新報』の批判記事は、「風化していく民族意識」は世代の問題ではなく反動的な思想教育と同化教育が問題だとして、「筆者の目には、朝鮮で生まれた人であれ日本で生まれた人であれ、胸深く秘めている祖国と民族に対する愛は映らない

15)上掲書 p.128

16)『朝鮮新報』1976年12月23日付けの論評 朝鮮新報社

17)姜在彦「在日朝鮮人の65年」(『季刊三千里』八号 三千里社 1976年11月 p.p.22~37)

18)飯沼二郎編『在日の文化と思想』麦秋社(早稲田) 1984年11月 p.p.140~141

のか。民族分断の悲劇を一日も早く終わらせ、統一された祖国で幸せに暮らしたいとする彼らの熱い志向も意にめさないのか」<sup>19)</sup>と締めくくっている。つまり、民族教育さえすれば、これを切り抜けることができるという論理である。

確かに、総連は、朝連のときから民族教育に力を注いできた。米占領軍による民族学校閉鎖命令と共に始まった公権の武力弾圧にもかかわらず、「阪神教育闘争」<sup>20)</sup>にみられるように死者を出しながらも民族学校を守った輝かしい歴史を総連は持つ。そして、当時、東京小平市の朝鮮大学を頂点とし、日本の小・中・高・大学教育に見合う一貫した教育体系を築き、総連系の民族学校の数は29都道府県に153校を数えていた。<sup>21)</sup>

しかし実質は、民族学校に通っていた在日児童・生徒・学生数は当時でも在日全体の4分1にしか過ぎず、大多数の在日は日本人学校に通っていたのが現状であった。

この点を指摘して、論文の中で姜在彦氏は「もし、一世であれ二世であれ、この(『朝鮮新報』)の評者のような気持を持っている同胞ばかりだったら万々歳じゃないですか。在日朝鮮人問題はなにもありませんよ。ところが、現実には在日同胞の全てではないが、かなりの部分がそうでないところに問題の複雑さがあるんです」<sup>22)</sup>と、問題は総連が指摘する民族教育を受けている者は少数者でしかなく、それ以外の者をどうするかという対策が総連には全くなかったことを述べている。

また、総連が主体を成す民族学校への進学が在日から嫌われた理由として、次のことがあげられる。まず、学校教育法にもとづくは認可を受けていないため、大学進学が困難であった。そしてそれ以上に、教育課程が北朝鮮本国の教育課程そのまま、かつ日本の社会で生活していくための「実践的知育」が全くなされていなかった。将来日本に定着するであろう在日のおかれた現状を考慮することなく、ただ北朝鮮に忠誠を尽くす「共和国(北朝鮮)国民」を育てるのに重点がおかれていた。このように、総連が目指す民族教育は、在日二世三世の実情に合わないものであった。<sup>23)</sup>

この現状を姜在彦氏は、

私がこの『一65年』で一貫して言っているのは、在日同胞がおかれている現状をしっかりと踏まえての『運動としての啓蒙と教育』の内容、あるいは『運動としての対策と方法』

19)『朝鮮新報』1976年12月23日付けの論評 朝鮮新報社

20)朝鮮人学校の閉鎖命令がGHQ(連合国軍総司令部)によって出され、これを守ろうとする在日朝鮮人は激しく抵抗した。それが頂点に達したのが、1948年の大阪と神戸を中心とする「阪神教育闘争」である。日本で初めての「非常事態宣言」(戒厳令)が兵庫県に公布され、アメリカ第8軍司令官アイケルバーカ中將が横浜から神戸に飛んできて、在日朝鮮人弾圧の指揮をとった。この時、多数の重軽傷者が出たばかりでなく、多くの人が検挙された。そして、この運動の渦中で、金太一少年が射殺された。(『在日コリアンの歴史』 明石書店 2006年2月 p.p.50~51)

21) 宮田浩人『65万人一在日朝鮮人』 すすざわ書店 1979年2月(1977年12月) p.128

22)「『朝鮮新報』の批判に答える」(『季刊 三千里』 十号 1977年 5月 三千里社 p.130)

23)宮田浩人『65万人一在日朝鮮人』 すすざわ書店 1979年2月(1977年12月) p.p.127~128

を考えなければならぬということなんです。このことを強調したいのは、じつはいまの総連のような教育、宣伝のやり方では、若い世代がついて行けないということを言いたかったからなんです。真に同胞のことを思うのなら、現状に合った対策を真剣に考えていかなければならぬのではないかとことですよ。だから、最後に結びとして、現在の日本生まれの世代の問題は、在日朝鮮人全体の中心問題として論議され研究されなくてはならないと言ったんです。24)

さらに、金石範氏は、

私がここで言いたいのは、現実には総連の意図道理になっていないということです。彼らが青写真を描くように客観は動かないんです。在日二世を根本問題と見なければならぬという姜在彦氏の意見に同感です。しかし、それを論じるときに、分かりきったスローガン式に、祖国統一がどうだとかいう抽象論を書くのではなく、生々しい現実を通して捉え、その上に立って問題提起していくことが大切だと思いますね。『祖国統一』の問題は遠近法としてすでに前提にあるということを知らねばならない。この意味において『朝鮮新報』の論評は、どう読んでみてもいまの在日問題の複雑な現状を分かって書いているとは思えませんね。かりに分かっているとしても、その現状に手を伸ばすことができないでいるということです。これだけの論評を書くなら、もっと責任をもってやるべきですよ。民団からも手を伸ばされず、また総連からも手が届いていない同胞がたくさんいるんです。これらの同胞は朝鮮人ではないというわけではないでしょう。このように放置されている同胞もまた多くいるんだということ素直に認めて、そして、『一65年』のような論文が出たら、そのなかで参考になるようなものを取ればいいですよ。客観的な事実を冷静に見て、在日朝鮮人の生活や教育に責任を持っている組織として、どのような対策を打ち立てるかが大事なのではないのでしょうか。25)

共に、総連の目指す民族教育の在り方を根本から問うているのである。そして、民族教育を日本生まれの在日にあった、つまり「日本に住むこと」を前提とした民族教育の必要性を感じ、総連の本国北朝鮮指向の教育を根本から正すことを訴えている。

また、李哲氏は、

この『誤った世代論』の中では、人の思想と意識は、その出身・居住のいずれかを区分尺度とするものではなく、「主体的な世界観」のみが全てを決めるものだというふう徹底した一方的な精神主義を説いているんです。かと思うとまた別なことを言う。これは同じく『朝鮮新報』に載った「断絶」という見出しのコラムなんですが、次のようなことが書いて

24) 『朝鮮新報』の批判に答える(『季刊 三千里』 十号 1977年 5月 三千里社 p.136)

25) 上掲書 p.132

あるんです。「在日同胞社会において見られる断絶現象は反動的思想風潮のうえに、一世と二世、三世という差異がかさなっている。まず一世たちは殆んどが故郷を知り、言葉をしているばかりでなく、植民地・半封建社会のなかで成長し、あらゆる民族的さげすみと侮辱を受けてきた世代である。反面、二世、三世たちはおおうにして日本語を使い、故郷に対する表象もない。のみならず、反動の巣窟で絶えず同化教育の影響をうけている……」と、『一65年』の筆者と全く同じことを言っているわけで、これも当然『論評』の対象ものですね。<sup>26)</sup>

と、『朝鮮新報』の論説に一貫性がなく、姜在彦氏の「在日朝鮮人の65年」の内容自体に問題があるのではなく、『季刊三千里』に載せられていること、さらに執筆者が姜在彦氏であることが、総連にとって問題であったと指摘している。つまり、総連にとって、『季刊三千里』は敵性雑誌、編集委員は敵性勢力で、それらは排撃の対象でしかなく、『季刊三千里』は真摯に討論する対象ではなかった。

座談会では、総連がこのような姿勢をとる理由として、金達寿氏が、

組織というのは、かかわりをもとしない人間までもそれこそ組織する。それが組織本来の仕事だと思うんですよ。それがいままで、内部にいる人を切り捨てることばかりしてきたわけです。いま金炳植<sup>27)</sup>の話が出ましたが、彼はその典型だったでしょう。当時、“宗派分子”という彼らの好きな言葉があって、それでもってわれわれは魔女狩りみたいにされたわけですね。しかし、考えてみれば、総連は党組織ではないのだから、大衆団体に“宗派分子”とか“分派分子”などというのは本来おかしいですよ。にもかかわらず、どんどん切り捨ててきて、いまや総連に集まる同胞は三分の一以下に転落しています。<sup>28)</sup>

と、大衆団体であるはずの総連が党派的行動によって、意見の異なる党員を切り捨てている現状を指摘している。これに続き、姜在彦氏も、

たしか総連の綱領規約は、思想・信条を越えて在日60万を共和国のまわりに結集するということが基本目的としたはずなんですが、もし、思想・信条を越えて在日60万を結集させることができなかった場合には、それなりに自分自身の活動を点検しなければならないはずなのに、そうした姿勢がまったく欠如しているんですよ。それから、現在日本生まれの世代が76%いると言われますが、実際は幼いときに、物心つくまえに日本に来た世代を含めれば80%を越えていると思います。こういう人たちが日本からも疎外され、祖国とも具体的につな

26) 上掲書 p.p.134~135

27) 1972年2月に「第一副議長」になり、総連ナンバー2として一時期議長をしのぐ勢力を持ち、最高人民会議代表議員にもなったが、12月に北に帰国し失脚。

28) 「『朝鮮新報』の批判に答える」(『季刊三千里』 十号 1977年 5月 三千里社 p.134)

がらないという彼らの置かれている現状、あるいはその悩み・傷みを自らのものとして捉えていたら、絶対にこういう論評にはならないはずだ。29)

と一様に、大衆組織であるにも関わらず党派的行動から内部の者を切り捨てることによって、総連の勢力が衰退している状況を批判している。さらに、金石範氏も、総連を大衆団体であることを前提として、総連の体質批判を行い、

私たちは、『朝鮮新報』にたまたま『季刊三千里』に関する論評が載ったためここで論議しているわけですが、本当はこれだけが問題ではないんですよ。『朝鮮新報』の発想法、結局それは総連の発想法なのですが、それが全く改まってないところから『季刊三千里』に対してこのような文章が出てくるわけですよ。私は自分を日本人とっていないし、当たり前ですが、在日朝鮮人の一人だし、五千万民族の一人ですよ。小さいながら祖国統一に関心をもって胸を痛めたり、喜んだりするんです。こうした気持は組織の内と外も変わりないと思いますし、だからこそ組織の外にいる人間であっても、総連のやる事に対しては一定の発言する立場にあると思いますよ。そういう意味では言わざるをえないんです。問題が最高指導部にあるとすればなおさらです。率直な話、いままでわれわれはなんにも言いませんでした。しかし、言うときはいわなければ駄目だという時期に来たみたいですね。30)

と、述べている。

ここで総連の組織について説明すれば、日本敗戦の年1945年の10月15日に、獄中から解放された民族主義、共産主義、労働運動家らを迎え、在日本朝鮮連盟(朝連)を結成。1948年9月、米占領軍政によって強制的に解散。その後、地下組織である在日本朝鮮民主民族戦線(民戦)を経て、1955年5月25日に在日本朝鮮人総連合会が発足。その綱領の規約第二条に「本会は思想、政見、信仰及び社会的地位を問わず、本会の綱領、規約を支持賛同する同胞の各団体と人士達で構成する民族戦線で、全体同胞の意志と利益を代表する」とある、傘下に14の団体、14の事業体を持つ、『季刊三千里』の編集委員達が口をそろえて言うように大衆団体である。

しかし問題は、その綱領に「在日朝鮮同胞を朝鮮民主主義人民共和国の周囲に総集結させる」とあり、さらに綱領二項には「米帝国主義者とその手先と闘い祖国の平和的統一と独立のために献身する」と掲げるように、北朝鮮の指示を明確にし米国・韓国との対決姿勢を示し、北朝鮮の「祖国統一民主主義戦線」に加盟(規約第六条)していることである。31)北朝鮮は、実質的に朝鮮労働党の一党支配で、その朝鮮労働党の指導理念を

29)上掲書 p.p.134~135

30)上掲書 p.135

31)宮田浩人 『65万人—在日朝鮮人』 すずさわ書店 1979年2月(1977年12月) p.304

そのまま受け入れた総連は、党派的性格を持つ組織でしかありえない。特に、金日成独裁体制が強化されるにつれ、総連の党派的性格はより鮮明になったため、それを嫌い組織を離れる者、切り捨てられる者が後を絶たなかった。『季刊三千里』の編集委員達も例外でない。

このように総連は、形式的には「思想、政見の違いに関わらない大衆組織としての性格」、実質的には「北朝鮮労働党の指導という党派的性格」という、合い矛盾する二つの性格を持ち合わせている。このため、『季刊三千里』と総連との組織論争は平行線をたどるしかない。

総連から攻撃され続けた金達寿氏は、

ぼくは今から十八、九年前に『朝鮮』という本を出したとき、『朝鮮新報』や『朝鮮時報』などの紙上で何回となく攻撃されました。……とにかく訳のわからない批判をされたら、罵られたりしても、わが組織の問題は外へ出したくない、出すのは恥さらしであるということで、ぼくだけでなく、皆さんも同様に黙って耐えてきたわけです。それが、今回初めて反論らしいものを座談会という形でやっているんですが、これはいいことだと思うんですよ。(32)

と、総連から攻撃された事実を、『季刊三千里』の誌面において暴露している。これは、他の編集員もおなじであった。

今まで総連の一方的批判に目をつぶってきたが、『季刊三千里』第十号の座談会を契機として、批判には受けて立つ立つという対決姿勢を示したと言える。しかし、この時点では、総連の党派的体質への批判に重点がおかれ、総連の全面否定は見られない。

その後、『朝鮮新報』だけでなく、他の総連の機関紙『朝鮮時報』『統一評論』『新しい世代』などにおいて、激しい批判が『季刊三千里』になされた。『朝鮮新報』には、6月4日付け「どの道を行くのか」に始まり、8月13日付け「とんでもない話」まで、大小十数編の批判記事が載せられた。まさに、総連組織をあげての『季刊三千里』批判が繰り返された。(33)そして、総連の議長韓徳銖氏が、直接『季刊三千里』を批判するに至った。

### 3 韓徳銖議長を批判する

1979年3月発刊の『提綱』(34)で『季刊三千里』を「反動的出版物」と規定。「総

32) 「『朝鮮新報』の批判に答える」(『季刊三千里』十号 1977年 5月 三千里社 p.136)

33) 金石範「『批判』についての批判」(『季刊三千里』十二号 三千里社 1977年 12月 p.88)

34) 『提綱』というものは、ある一定の時期ごとに、総連幹部が学習する中心内容を規定したもので、それに依拠して

連第14次分会熱誠者中央大会での韓徳銖議長の報告」<sup>35)</sup>にて、総連の韓徳銖議長が直接「反動的謀略雑誌」と『季刊三千里』を名指して批判。さらに、「在日朝鮮文芸芸術家同盟結成20周年記念集会」<sup>36)</sup>で、やはり韓徳銖議長が「民族虚無主義者」の集まりと『季刊三千里』を批判。

総連の最高議決機関は3年に一度の全体大会であり、大会と大会の間の意思決定は執行機関の役割を果す中央委員会の常任委員が行う。中央常任委員は、議長、副議長、常任委員、監査委員で構成されているが、1955年5月25日の発足以来一貫して韓徳銖氏が議長職にあり、北朝鮮の金日成主席の「唯一指導体系」にならい韓徳銖議長の「唯一指導」の下に中央委員会は運営されてきた。<sup>37)</sup>すなわち、韓徳銖議長による直接批判は、『朝鮮新報』を通して『季刊三千里』を批判するのは次元が異なり、総連が『季刊三千里』に全面対決を宣言したと言っても過言でない。

### 3-1 独善性への批判

この時から、総連は『季刊三千里』の購読を団員に禁止した。これについて、李哲氏が、

都内のある支部の集会で、もし『季刊三千里』が送られてきたり手にいれるようなことがあっても、読んではならない。そのまま機関のほうへ持って来い、と支部長が言ったというんです。それで、多少関心をもったある同胞が、それはどういう雑誌で、どこが悪いのかと尋ねたところ、委員長いわく「私も分からない。中央の方でそうしているのだから、そうしろ」。38)

そして、姜在彦氏が、

この間もある朝銀信用組合の組合員総代会で、理事長が基調報告のなかで例のごとく『季刊三千里』に対するレッテル貼りをやったそうです。それに参加していた同胞が「私もちょっと読んだことがあるが、この雑誌のどういう内容からそのように判断できるのですか」と質問したら、理事長いわく「中央でやれと言ったからやっただけだ。私もその理由はわからない」と。これは同胞大衆を愚民視する姿勢だと思うんです。同胞大衆は自らの目でこの雑誌を見て判断する能力がないものと、はじめから決めかかっている。非常に高慢なやりかたじゃないですか。39)

---

末端の同胞大衆への宣伝学習が行われる。

35) 『朝鮮新報』1979年5月31日付け 朝鮮新報社

36) 『朝鮮新報』1979年6月22日付け 朝鮮新報社

37) 宮田浩人 『65万人—在日朝鮮人』 すずさわ書店 1979年2月(1977年12月) p.304

38) 「総連・韓徳銖議長に問う」(『季刊三千里』 二十号 1979年11月 三千里社 p.p.94~95)

と証言するように、購買を禁止するだけでなく、読むこと自体をも禁止している。しかし、読まなければ批判もできないはずである。ここに、当時の総連の体質があらわれているといえる。ことの善悪は全て上が判断するもので、総連団員またその心棒者はただその指示に盲目的に従えばいいのである。即ち、善である総連にとって悪である『季刊三千里』との論争は無用であり、『季刊三千里』は民族を守るための征伐の対象でしかない。

さらに、金達寿氏は、

辛基秀氏が映画『江戸時代の朝鮮通信使』を製作して、日本人の間に多大の感銘を呼び起こしているのだが、それを総連はボイコットした。どうしてかというと、辛基秀氏が『季刊三千里』に毎号グラビアを書いているから、という理由なんだ。編集委員でなくても、ただ執筆しているだけでもいけないということなんだな。40)

『季刊三千里』だけでなくそれに関係するものは全て敵である、という総連の姿勢を指摘した。

ここに、総連に対して自分達(『季刊三千里』)の立場を明確にするために、編集委員、姜在彦、金達寿、金石範、李進熙、李哲氏によって、「総連・韓徳銖議長に問う」という題目で座談会をくみ、これを1977年8月発行の『季刊三千里』十号に載せた。つまり、『季刊三千里』として、韓徳銖＝総連の批判に答えることを意味するものである。これは、『朝鮮新報』に反論するのは次元が異なり、総連への対決姿勢を明確にすることによって可能である。

『朝鮮新報』の記事と同じく、韓徳銖議長の演説は、

- \* 「反動的出版物の虚偽・謀略宣伝にたして、警戒心をもって対処し、たたかいを繰り広げなければ、奴等が総連の組織のなかに楔をうちこみうる、緊張の緩んだ現象をうみ出すようになる」(『提綱』)、
- \* 「反動的謀略雑誌を徹底的に排撃しなければなりません」(中央大会)、
- \* 「我々は『三千里』のやからどもの本質が民族虚無主義であることを知らねばなりません。彼らのいわゆる『文学』は朝鮮文学とは何ら因縁もありません。それは、我が運動にとって百害無益であります」(芸術同盟)

と、『季刊三千里』を批判した。これに対し、座談会に参加した編集員のメンバーは、

金達寿氏：『季刊三千里』は、内容を詳細に検討するまでもなく、少なくとも目次だけを

みればすぐわかるはずで。これが反共和国でも反総連の雑誌でもないことは、文字の読める者なら誰にでも分かると思う。ところが自分の目で見、内容を読むこともしないで、あえてやみくもに敵視しなければならないというのは、どういうことなんでしょうか。41)

**李進熙氏**：統一問題は総連だけの専売特許じゃないし、また民団の専売特許でもなんでもなし。これは朝鮮民族全体の問題なんだ。42)

**姜在彦氏**：だいたい今のような言論の自由のある日本社会の中で、どういう新聞がどのように取り上げようと、それは当然でありうるものとして前提にしなければならない。総連も言論の自由が保障されていて、誰を糾弾しても自由であるのだから。その前提に立って、自分の組織がどう扱われても、いつ、どこで、誰から、どのように突っ込まれても、ひびかないような公明正大な組織、それに耐えうるような組織をつくらなければならないのではないんですかね。43)

**李哲氏**：総連はおのれの旗のもとに、在日同胞の権益擁護と祖国統一をはかろうと言いつつながら、たった数人でやっている『季刊三千里』の存在さえ乗り越えることができないようでは、彼らの言う民族の大事業などできませんよ。閉鎖的な、硬直した思考というものが今日なにももたらしたのか、総連自身が誰よりも良く知っていることだと思う。どうしてわれわれを攻撃する前に、おのれを省みる姿勢になっていない。44)

と異口同音に、総連の「総連の指導下で出された出版物以外は、論ずるに足りないもので、全て総連組織ひいては在日朝鮮人社会に混乱を来し、統一を妨害する『反動的謀略雑誌』」と規定する独善性を批判し、このような総連は民族の大事業(祖国統一)を主導する勢力になりえないとまで述べている。

さらに、韓徳銖議長自身に対する批判まで及んだ。

**金石範氏**：問題は、彼(韓徳銖)が何故今『季刊三千里』を敵視しなければならないかということだと思うんです。端的に言えば、総連の一連の“三千里批判”は、この雑誌が総連の最高責任者である韓徳銖氏が気に入らないんですよ。……おそらく編集委員全部が気に入らないのじゃないでしょうか。たとえば私個人、金石範にしても『季刊三千里』以外に韓徳銖氏のことを批判的に書いたりしているわけですよ。……それとも一つ、われわれ組織を出ていった連中が、沈黙していればいいのに、彼のことを批判的に書いている。こういう

41)上掲書 p.94

42)上掲書 p.102

43)上掲書 p.102

44)上掲書 p.102

ことは総連の歴史においてかつてなかったんですよ。これまでは「韓徳銖・総連」というのは決して侵してはならない“聖域”だった訳です。45)

**金石範氏：**われわれは総連が、祖国統一なり在日朝鮮人運動において、少なくとも在日全同胞に対して決定的な指導力をもってほしいわけです。ところが、いまみたいに閉鎖された状況では、そのような指導力は発揮できないし、われわれの批判にたいしても何故ああいレベルでしか反論できないのか。どうして、総連の“権威”あるいは中央機関の『朝鮮新報』にですよ、小説を書いているという意識分子の、あのような文章が載るのですか。意識分子というのはいちおう指導層に属する人間だ。しかも議長の韓徳銖氏はそれを読んでいるはずだ。韓議長がどう思っているか知らないけれど、ああいう文章が組織の中央機関紙に載った場合、韓議長は恥ずかしく思わなければ駄目ですよ。そういう恥の感覚が磨滅していて、しかも中央機関紙にまかり通っているような状況下では、どうして在日同胞を自分達のもとに結集させて、影響力をおよぼし、祖国統一への一つの力になりうるのか。46)

既に述べたように、総連は韓徳銖議長の「唯一指導」の下に運営されているため、このような韓徳銖議長批判は、総連を全面否定することを意味する。即ち、『季刊三千里』と総連の対立関係は、この時点で後戻りできないところまで来たと言える。

### 3-2 総連組織の体質を批判

ここに、『季刊三千里』の総連組織に対する考えを、編集委員メンバーの言葉を借りれば、

**金達寿氏：**彼らは、自分のみを正義とし、自己絶対化の上に立ってしまっている。……論より証拠、総連をみればわかるが、そこでは批判することはいっさい許されず、許されるのは拍手だけとなっている。権力意識だけが增大して、どうしようもない官僚主義の組織になってしまっている。本来、総連は統一戦線の組織なんですよ。つまり、意見の異なる者も批判者も包括する大衆団体であり、そういう統一戦線なんだ。ところが、現在の総連はわれわれのことを民族虚無主義だの何だのときめつけて、いわゆる一枚岩の党組織のようなものになってしまっている。もし、総連が本当に大衆団体または統一戦線として批判するなら、『季刊三千里』に対しても大所高所から、どこがどうなのか、それを具体的に指摘すべきであるのに、頭からただ「反動的謀略雑誌」だと言う。47)

**姜在彦氏：**組織内における地位とは関係なしに任務分担の上での上下関係を越えた同

45)上掲書 p.105

46)上掲書 p.p.101~102

47)上掲書 p.99

士的な立場で行わなければならない。そのことによる組織内の民主主義があつてこそ、組織はいきるものだ、ということでしょう。しかし、現実には、民主主義中央集権の中で民主主義だけが消え、つねに上の方針と指導は正しいのに、中間単位がその正しいものを執行できないところに問題があるという論法なんですよ。ですから中間単位の幹部たちがたいへん苦しいとおもいますね。とりわけ支部の活動家たちは、大衆からは反発をうけ、上からはおまえたちが執行する過程でまちがっているんだ、と責任を転嫁されている。つまり成果が上がれば、それはすべて上の方針と指導が正しかったといて、その功労を独占し、失敗があれば、その責任はすべて下部の活動家に転嫁するという具合でしょ。48)

**金達寿氏：**我が組織の活動家にあらざる者は愛国者でない、という論法で我々を“批判”する。しかも、こういった自己を絶対化する発想法が、祖国統一を妨害しているということについては、まったく考えが及んでいない。イデオロギー、思想ばかりか、相手の存在そのものを全否定するようなやり方、考え方では、統一などはできないのではないか。いったい誰と統一しようというのか、ということになる。たとえば、本当に平和統一を考えるならば、ある時期が来れば民団とも話し合いのテーブルにつかなければならないでしょう。それなのに誰かれおかまいなしに、相手を抹殺する論理しか持ち合わせていない。それでは、いつまでたっても統一はできないですよ。49)

**姜在彦氏：**祖国統一というのは決して抽象的なことではないんです。思想・信条を越えて統一を願うすべての人間が大同団結し、それを阻害する傾向に対しては、総連であれ民団であれ、その他の誰であれ、われわれは断固として意見を言うていくことではないでしょうか。かつて日韓会談に反対した我々の理由の一つに、この会議は在日60万同胞を「朝鮮」と「韓国」と分けて、三八度線を在日同胞のなかに引こうとするものがあつたはずで

す。50)

**李進熙氏：**分熱誠者大会の記事をみますと、祖国統一のために思想・信条を越えて話合おうとしながら、一方では『季刊三千里』を徹底的に排撃せよとっている。もしこれを民団側からみれば、かつて同じ釜の飯を食った人たちとも話し合いができないで、われわれと果たして話し合いができるのだろうか、疑問に思うでしょう。51)

**姜在彦：**中立的だとか中間的立場でなく、党派的立場を止揚した民族的立場から発言しなければならぬ。52)

---

48)上掲書 p.100

49)上掲書 p.93

50)上掲書 p.92

51)上掲書 p.93

52)上掲書 p.93

以上を整理すれば、「在日朝鮮人を全て網羅した大衆団体あるいは統一戦線という過去の総連の性格は既に消え、自分達の主張だけが正しくそれに反するものたちとは闘争によって打倒するという党派的性格に変わった。これでは、総連は、その結成目的である全在日朝鮮人の権益擁護、祖国統一への主導的役割は果せない。むしろ、その排他主義から在日朝鮮人の団結、祖国統一への障害になるものである」となる。

『季刊三千里』と総連とは、共存できない対立関係が形成されたといえる。

## 4 おわりに

在日は、過去において北または南の政府のいずれかによってその行動は制限され、本国の指令に無条件従うしかなかった。しかし、それは一世においては問題ではなかった。彼らの最終目的は、統一された祖国に帰り幸福に暮すことであった。そこには、日本に住むという選択肢はなかった。このため、北であれ南であれその指示に従い、祖国の建設に心身を捧げるのは当然のことと考えられた。しかし、祖国を知らずかつ同化が進んだ二・三世にとっては、好むと好まざるとに関わらず、自分達が対峙しているのは北でもなく南でもなく現実の日本であり、さらに日本への定着という選択肢しか残されていなかった。ここに、朝鮮人として日本における差別の中で、自分達自身の未来を模索する必要があった。

こんな時、北からも南からも自由な視点を持って民族を考え、統一を考え、自分達の未来を主体的に切り開こうとした雑誌『季刊三千里』が創刊された。その編集委員は全て在日一世であったが、在日のおかれている現状を踏まえた上で、在日二・三世の未来への指針を示した。

『季刊三千里』は、創刊号の特集が「金芝河」であったことからでもわかるように、終止一貫して南の反独裁民主化勢力との連帯の立場を堅持したことは間違いない。また、南の反独裁民主化運動も、『季刊三千里』を通して日本に紹介された。

しかし、これから直ぐに、『季刊三千里』が「反韓親北雑誌」であるとの判断は下せない。反政府(反独裁政権)＝反韓親北という公式は、独裁政権が反独裁民主化勢力を抑えるために作られた公式にしか過ぎなかったからである。在日において、反韓親北であるかどうかは、親総連であるかどうかに尽きる。この時、総連は結成当時の大衆組織から党派的組織へと変貌し、さらに北朝鮮の「海外公民団体」としての役割を果たしていたためである。

『季刊三千里』は、その創刊号から、南北どちらにも勿論総連とも与しない独自の立場に立って編集を行った。その論調は、総連の祖国(北朝鮮)への盲目的追従とは異なる

り、在日のおかれている現状「日本への定住」に根差したものであった。これに対し、総連の指導方針は、韓徳銖議長「唯一指導体系」下で金日成主義を実践することであった。それに従わないことは、反共和国行動で、かつ祖国統一を阻害するものと見なされた。つまり、総連の指導のもとでのみ活動が許された。この時点で、『季刊三千里』は、反総連雑誌といえる。

『季刊三千里』の編集委員は、全てが総連の元活動家であった。大衆団体であったはずの総連が党派的性格を色濃くするにつれて付いて行けず、自ら組織を抜け出たかまたは組織から切られた彼らは、総連からみると価値のない脱落者でしかなかった。そんな彼らが編集する『季刊三千里』は、総連にとっては組織の妨害物でしかなかった。このため、根柢をあげての論争をする価値もなく、ただ購読を禁止し一方的に「反共和国謀略雑誌」と批判するだけで十分であった。

これに対し、『季刊三千里』の最初の対応は、総連の批判内容は論争にならないと断った上で全面的な対応は避け、総連の党派的体質を批判しながら異なる考えつまり『季刊三千里』の論調も認めると言う自衛的なものであった。金石範氏が「われわれは総連が、祖国統一なり在日朝鮮人運動において、少なくとも在日全同胞に対して決定的な指導力をもってほしいわけです」<sup>53)</sup>と言うように、『季刊三千里』の編集委員達は、まだ大衆団体の性格を総連が持っているの幻想を捨てきれずにいた。

しかし、韓徳銖議長のあからさまな『季刊三千里』批判からその様相は激変した。

『季刊三千里』は、第二十号に載せられた座談会「総連・韓徳銖議長に問う」によって、総連の唯一指導者の韓徳銖議長を直接批判するにいたり、総連に対し対決姿勢を明らかにする。そして、今の体質では在日朝鮮人の団結ひいては統一に弊害にしかならないと、総連を全面否定した。

まだ、この段階では総連組織の体質批判の域をでていなく、その本質である総連の指導理念「金日成主義」批判までには至っていない。しかし、その後の『季刊三千里』において、「金日成主義」批判<sup>54)</sup>と、総連だけでなく北朝鮮自体への批判が始まる。これは、南に対する政府批判とは次元の異なるものである。つまり、北には反政府勢力がなく、北の政権批判は、即、反共和国(北朝鮮)を意味する。総連、そして『季刊三千里』の意図とは別に、『季刊三千里』が「反共和国雑誌」と変貌して行ったと言える。これらに対しては、次の機会に述べたい。

結論として、『季刊三千里』の立場は、親北(朝鮮)ではなく、反北(朝鮮)である。つまり、「親北雑誌」ではない。

53) 『季刊 三千里』 二十号 1979年11月 三千里社 p.p.101~102

54) 林誠宏 「『金日成主義』を問う」 『季刊 三千里』 三十七号 三千里社 1984年2月 p.p.131~141

## 【参考文献】

- 姜尚中『在日』 集英社 2008年6月  
姜尚中『在日ふたつの『祖国』への思い』 講談社 2005年3月  
金石範『「在日」の思想』 筑摩書房 1981年12月  
鄭大均「在日韓国人の終焉」 文芸春秋 2001年4月  
松山大学総合研究所編『日本の眼・韓国の眼・『在日』の眼』 晴耕雨読 1998年3月  
飯沼二郎編『在日の文化と思想』 麦秋社(早稲田) 1984年11月 p.p.140~141  
宮田浩人『65万人—在日朝鮮人』 すすさわ書店 1979年2月(1977年12月)  
ホルモン文化編集委員会「在日朝鮮人揺れる家族模様」ホルモン文化4 有限会社新幹社  
1993年11月  
『季刊三千里』 三千里社 八号 1976年 11月  
『季刊三千里』 十号 三千里社 1977年 5月  
『季刊三千里』 十二号 三千里社 1977年 12月  
『季刊三千里』 二十号 三千里社 1979年 11月  
『季刊三千里』 三十七号 三千里社 1984年2月  
『季刊三千里』 五十号 三千里社 1987年 5月  
『在日コリアンの歴史』 明石書店 2006年2月  
『在日朝鮮人研究』 創刊号 在日朝鮮人運動研究史会 1977年12月

## 要旨

『季刊三千里』は、創刊号の特集が「金芝河」であったことからでもわかるように、終止一貫して南の反独裁民主化勢力との連帯の立場を堅持した。しかし、これから直ぐに、反韓親北であるとの判断は下せない。反政府(反独裁政権)=反韓親北という公式は、独裁政権が民主化勢力を抑えるために作られた公式にしか過ぎない。在日において、反韓親北であるかどうかは、親総連であるかどうかによって判断可能である。

『季刊三千里』は、その創刊から、総連とは異なる独自の路線でもって編集されたと言える。その論調は、在日のおかれている現状に根差したもので、特に二世三世に大きな影響を与えた。総連は大衆組織から党派的組織に変貌しており、総連の指導下以外での活動は許さなかった。このため、総連にとって『季刊三千里』は排撃の対象でしかなかった。そこには根拠をあげて論争するという姿勢はみられず、まず総連組織をあげて『季刊三千里』の購読を禁止し、一方的に「反共和国謀略雑誌」と批判するのみであった。

これに対し、最初は論争にならないと断った上で、全面的な対応は避け、総連の党派的体質を批判し、異なる考えつまり『季刊三千里』の論調も認めろと言う自衛的な対応であった。しかし、韓徳銖議長のあからさまな『季刊三千里』批判から様相は激変した。

『季刊三千里』は、総連の唯一指導者の韓徳銖議長を直接批判することによって、総連に対する対決姿勢を明らかにした。そして、総連の体質批判を越え、今の体質では在日朝鮮人の団結ひいては統一に弊害にしかならないと、総連を全面否定するに及んだ。

『季刊三千里』の立場は、親北(朝鮮)ではなく、反北(朝鮮)である。そして、「反韓親北雑誌」ではない。

キーワード：季刊三千里、朝鮮新報、在日、総連、民団、韓徳銖、反韓親北雑誌

투 고 : 2010. 11. 30

1차 심사 : 2010. 12. 11

2차 심사 : 2011. 1. 08